

京都府出版の名勝記に見る嵐山・嵯峨野の景物に関する研究

水谷 肇¹・山口 敬太²・出村 嘉史³・川崎 雅史³・樋口 忠彦³

¹学生員 京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻（〒605-8501 京都市左京区吉田本町,
E-mail:hajimail@ningen1.gee.kyoto-u.ac.jp）

²学生員 京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻（〒605-8501 京都市左京区吉田本町,
E-mail:kyama@ningen1.gee.kyoto-u.ac.jp）

³正会員 工博 京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻（〒605-8501 京都市左京区吉田本
町, E-mail:demu@ningen1.gee.kyoto-u.ac.jp）

嵐山・嵯峨野への観光の起源は古く、平安時代前期の貴族が行う別荘での遊宴にまで遡ることができる。本研究では、このように数多くの人々が魅了されてきた嵐山・嵯峨野の魅力とは何かを、景物の変化をたどることで明らかにし、嵐山・嵯峨野において愛され続けてきた風景の特性を示した。

キーワード: 嵐山, 嵯峨野, 景物, 観光, 名勝記

1. はじめに

日本人は古来より旅と共に風景を鑑賞してきた。嵐山・嵯峨野への観光の起源は平安時代前期の貴族が行う別荘での遊宴にまで遡る。それ以来も観光は歴史の経過と共に、名所巡りや物見遊山など様々な形で行われてきたが、それは緑豊かな自然と水、長年培われてきた伝統と文化や、この地に暮らした先人たちの営みによって育まれてきたものである。均質化の波が嵐山・嵯峨野をも襲おうとする今、先人の努力と歴史の重みを再認識し、将来に渡って持続可能な観光を推進するため、地域が本来有するこれらの貴重な資源を守り育て、次の世代に引き継いでいかなければならない。そのためには、この嵐山・嵯峨野地域が長くに渡り着々と育んできた人と地域の関係と風景を知ることが重要であると考えた。

本研究の目的は、嵐山・嵯峨野において愛され続けてきた風景の特性を、当時注目されていた景物の変化を見ることで明らかにすることである。

2. 研究の手法

(1) 研究対象

研究対象地としては、歴史が古く、かつ現在も京都の主な観光地として数えられる嵐山・嵯峨野地区を選んだ。具体的には、明治時代から昭和時代にかけての主な観光案内書に紹介されているコンテンツを題材にして、当時の風景観を読み取り把握した。（図-1）

(2) 分析手法

京都市役所が発行した『京華要誌¹⁾』、『京都名勝記：中巻²⁾』、『新撰京都名勝誌³⁾（1915年版）』、『新撰京都名勝誌⁴⁾（1928年版）』の4冊の観光名勝記から景物に関する記述を抜粋して比較し、景観に関する記述が一貫しているものと、景観に関する記述に変化があるものに分類した。その上でその特徴を抽出してまとめた。なお、史料の等価性を強めるため、用いた史料は全て同一の立場・目的で書かれた4冊を選択した。

3. 景観に関する記述が一貫しているもの

(1) 寺社仏閣

景観に関する記述が一貫しているものとしてまず寺社仏閣に対するものが挙げられる。天龍寺の庭園に関する記述として、「林泉は開山国師の意匠を凝し經營せしものにして、中心に清池あり、曹源池と称す。池畔奇巖怪石參差として、老檜古松交錯なす。」（太文字筆者）というように、例えば庭園の中の特殊な植栽などを直接美観と結びつける捉え方が行われていたことがわかる。また、「春の花季正に至る頃夜半より嵐山の風光を眺むれば、洞中より武陵を望むか如く、秋節紅葉の頃には近く池畔に遠くは嵐山一帯に紅葉の錦を織り成し、風情言はむ方なく」のように、春秋の嵐山を借景とした風光のよさについて、4冊の名勝記に同様の記述が成されている。

仁和寺の項では、「境内桜樹いと多くして、いづれも老幹蟠屈し、花は複弁にして濃艶の趣饒く、御室の桜狩

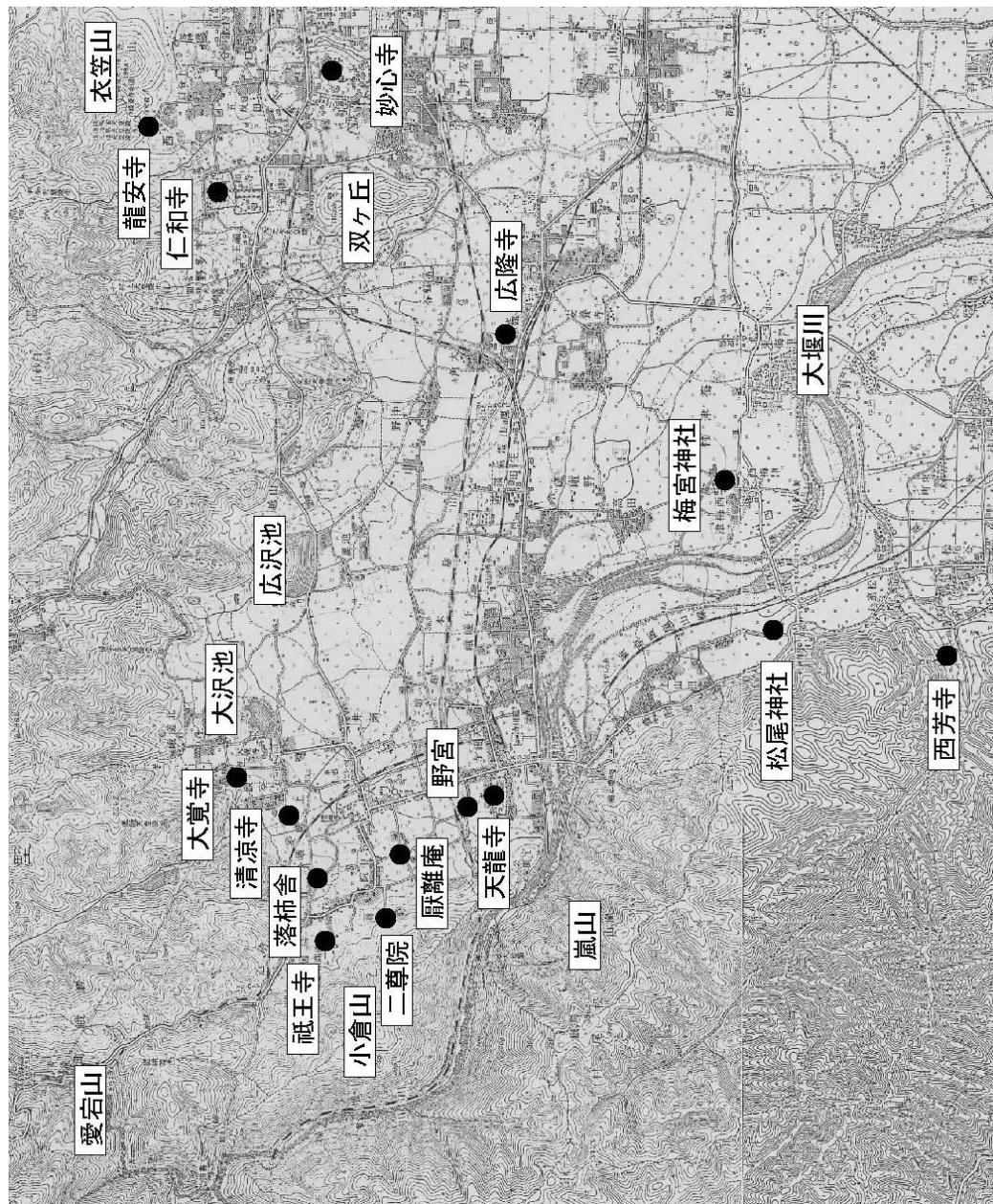


図-1 対象地概要

といふは即ち是にして、花季は嵐山よりやや後る」とあり、二尊院の項では、「総門東向、中門西向、此間楓樹多し」と記述され、花見・紅葉狩りが行われていたことがわかる。

また野宮の項では、黒木の鳥居と小柴垣の存在について書かれていたり、妙心寺の項では、大方丈が檜皮葺であったことが書かれており、建物そのものの外観に関する描写が一貫している。

このように、寺社仏閣、名所旧跡に関してはその庭園美や周囲の自然環境、さらには建造物そのものが注目されていたことがわかる。

(2) 伝承

a) 悲話

千鳥淵の項では、「平家物語に使女横笛瀧口を慕ひ来りしにその逢はれざるを恨み、此の淵に来りて身を沈めし」とあるように、横笛の悲恋の物語を伝えている。また、祇王寺の項でも、「むかし平相国の妾姫祇王世の無常をはかなみ、〈萌出るもかるるも同じ野辺の草何れか秋にあはてはつへき〉と一首の歌を書のこし、窃に邸中を遁れ出て、其の母刀自及び其妹祇女と共に此寺に入り尼となれり。仏御前もこれをきて同しく尼となり、共に往生の願を遂げしところ今に其墓あり。」と世の無常を感じさせる伝説が書かれている。

このような悲しい伝承は嵯峨野の「閑寂な」イメージをより増幅する効果があったと思われ、こういった場所を訪れた旅行者たちはそのイメージに浸ることでその場所をより深く楽しんでいたのであろうと推測できる。

b) 和歌

双ヶ丘や小倉山などは「古来和歌の名所」であったと記述されている。和歌も悲話と同様、イメージを増幅し、その場所を深く楽しむための要素であったのだろう。

(3) 山

嵐山・嵯峨野は双ヶ丘や衣笠山、愛宕山、小倉山、亀山、嵐山といった数多くの山に囲まれた立地条件である。例えば双ヶ丘では、「満山松樹蓊鬱として、蒼翠滴るが如し」と、松が鬱蒼と繁っている様を賛美しているが、例えば愛宕山では、「雄峰高く聳へて、東西に山丹二州を瞰下す。白雲時に山巔を封して靈境を秘するもの如し」と、崇高な山の美を謳っている。さらに、小倉山は、「時雨亭旧址は小倉山の半腹にあり。眺望最もよし」と、山の上からの眺望を楽しんでいた様が書かれている。

このように嵐山・嵯峨野の山々はそれぞれの山について異なった楽しみ方をしていたことがわかる。

(4) 観月

広沢池は、「古来観月の勝地として其名高く」と記述

され、月見を楽しむ池として認識されていたことがわかる。

(5) 嵐山景観

渡月橋を中心とする嵐山地区の記述はほぼ一貫したものである。「西北は小倉山亀山に対し峰巒重疊、ここに至りて山勢開け、嵯峨野に臨みて屏立す」からは山の景色を楽しんでいる様子がわかる。「山中桜花多く、毎年四月中旬盛開の比は、幾団の香雲暖雪、淡靄濃霞の間に掩映し、清流にうつれるなど絵にも文にもうつしかたき景色は、たた見たる人のみ首肯すへし」からは花見を楽しんでいた様子が、「秋晚霜酣にして、深紅淡黄、青松綠樹の間に繡錯する景色は丹青映帶の妙を極むといふへし」からは紅葉を、「初夏新樹の翠を滴らし、翠をみなきらす光景、一段騒人雅客の幽賞にかなひ」からは夏の緑を、「三冬雪の晨のけしきまた絶佳なり」からは冬の朝の景色を楽しむことができた様子を読み取ることができる。さらに近くに千鳥淵があり、横笛の悲しい伝承を感じることもできる。まさに渡月橋を中心とする嵐山地区は嵐山全体の縮図と捉えられ、寺社仏閣・桜見・紅葉狩り・伝承・山と嵐山・嵯峨野での楽しみを一箇所で享受できる場所として提示されていたと言うことができる。

4. 景観に関する記述の変化

第3章では景観に関する記述が一貫しているものを把握したが、中には景観が変化しているものも存在し、その時代において新たに発見されたものや、逆に失ったものを捉えることができる。

(1) 龍安寺の鴛鴦

龍安寺にある鏡容池についての記述を抜粋してみる。

1903年(明治36年)『京都名勝記:中巻』によると、「鏡容池の四辺の光景最も幽邃なり。水禽多く来り遊び、龍安寺の鴛鴦とて洛北の一奇勝なり」と、池に水鳥が遊ぶ風景が龍安寺の鴛鴦として紹介されている。しかし1915年(大正4年)『新撰京都名勝誌』には、「鏡容池の四辺の光景最も幽邃なり。水禽多く来り遊び、昔は龍安寺の鴛鴦とて洛北の一奇勝たりき」と、龍安寺の鴛鴦は過去の物として書かれており、龍安寺の鴛鴦が消失したことがわかる。しかしながら、このように失われた風景を敢えて記述している点は、伝承を大切にする嵐山・嵯峨野の性格によく一致しており、失った風景を想起させて楽しませようとする意図が伺える。

(2) 祭事と催し事

1895年(明治28年)『京華要誌』では扱いが小さかった、

または記述のなかった祭事や、瓦投げや保津川くだりなどの催し事が1903年(明治36年)『京都名勝記：中巻』では大きく取り扱われるようになった。祭事や瓦投げ、保津川くだりは新しくできたものではないが、記述の内容にそういうアクトティビティが含まれるようになったことが把握できる。

(3)広沢池の周辺

広沢池周辺の景観についても変化が見られる。1895年『京華要誌』には広沢池の桜についての記述は何もなかったのが、1915年『新撰京都名勝誌』によると、「近年また岸辺に桜樹を植ゑ、風光頗るよし」と、桜を植樹したことが書かれており、さらに1928年『新撰京都名勝誌』によると、「南側を護するに長堤を以てす。近年此の長堤に桜樹天を蔽ひ、花時の眺望更に趣を添うるものあり」というように長堤にも桜を植樹したと記述されている。

つまり観月の勝地であった広沢池に新たな景物(桜)が付加されたことがわかる。ただし、本来その場所の持つイメージを大切にしてきた嵐山・嵯峨野において、嵐山や仁和寺に特徴的であった桜を新たな景物として導入された点からは、観光のスタイルの一般化や大衆に分かりやすい景物を求める傾向が読み取れる⁵⁾。

5. 結論

以上より得た知見は次のようになる。

- a) 嵐山・嵯峨野において注目されてきた普遍的な風景の特性とは、
 - ・ 寺社仏閣にまつわる景観
 - ・ 伝承にまつわる景観
 - ・ 山に関する景観
 - ・ 観月に関する景観
 - ・ 嵐山に関する景観があり、それらは全て渡月橋周辺の景観の中に発見することができる。
- b) 嵐山・嵯峨野の風景の楽しみ方は、伝説や伝承、和歌によってさらに深められる。そして例え景物が消失しても、そのイメージを想起させて実際はない風景を見るところに特色がある。
- c) 観光の大衆化の時期に合わせ、嵐山・嵯峨野地区の各場所と結びついて固有のものであった景物が、敷衍化され、景物の存在理由が希薄化する傾向を読み取ることができる。

参考文献

- 1) 京都参事会編：京華要誌, 1895
- 2) 京都参事会編：京都名勝記 1903
- 3) 京都市役所編：京都名勝誌, 1915
- 4) 京都市役所編：京都名勝誌, 1928
- 5) 田中 尚人ら：京都嵐山における鉄道を基軸とした郊外形成に関する研究 土木計画学研究・講演集 Vol: 26巻